

高橋和巳全集

第九卷

吉川幸次郎
壇谷雄高

河出書房新社

高橋和巳全集 第九卷

小説 9 ©1977

一九七七年十二月十日 初版印刷
一九七七年十二月十五日 初版発行

著 者 高橋 和巳

発 行 者 佐藤 皓三

発 行 所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五
電話 営業〇三―三五五―五三一
編集〇三―三五五―五三二
振替 東京〇―一〇八〇二

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

日本の悪霊

3

革命の化石

377

解題・補記

383

第九卷
小説
9

日本の悪霊

第一章 日本の悪霊

1

向いあわせに六つの雑居房のならんだ保護所の廊下には、まのぬけた間隔をおいて、昼間から黄色い裸電球が点^{とも}されていた。巨大な螢籠のようにみえる金網が、中に蹲^{すま}っている容疑者たちの姿を映して、それ自身がかすかに蠢動^{うごめ}しているようにみえる。もの悲しい流行歌をくちさむ声^{こゑ}がしていた。内勤の警邏に監視された選挙違犯^{えいぎ}が二人、洗面所に通ずる廊下の長椅子に腰かけて煙草をすっていた。片方の手で燻^{くわん}る煙草をもち、銀色に光る手錠をはめられた片手は、バンドを取りあげられたズボンの上端をおさえている。扉が開閉され、鍵のふれる音がすると、留置の倦怠よりも取調べの屈辱^{くつじやく}を願う容疑者たちが、盲者のように一斉に金網に身をすりよせる物音がする。その物音は、浅ましい欲望につかれて原色の街にいざり寄る男たち、あるいは餌箱の中でもつれあって蠢めくみみずを連想させた。許された一日三本の喫煙時間を貪^ねっていた二人の男もまた、もはや人間のものではない、追いつめられた鼠のような眼をしていた。

彼、落合刑事部巡査はそのとき、自分の貧しい過去の中へ足をふみ入れたような錯覚をおぼえた。昨夜の昇任試験の準備がたったのか、神経は疲れて、ただ六つにすぎない金網のならびが、無限につづくようにみえた。湿った空気の中を細かい埃^{ちり}がまい、無気力な流行歌の声^{こゑ}が流れた。

「はよう出してくれよ。はよう出したってえな。わいは痔が悪いんや。ほんまに肛門が外にめくれかえってしまいうわ」廊下の奥の、腰の高さまでしかない便所に隣りあった金網の中から声がかかった。「ポリさんよ。頼みまっせ、早いところ」

「時計商の息子でね。親爺に訴えられた奴ですよ」警備巡査は、すぐ脇の宿直室から座蒲団をとりだした。「四十八時間を出してくれるのと違いまんのか。よう、人権蹂躪や、警察に訴えたるぞ」空虚な笑い声が保護所にみち、流行歌はやんだ。「早うしたりいな。前の豚箱にいる奇麗なお姉ちゃんも、メンスやいうて泣いてはりまっせ」

「やかましい」と落合は言った。

「ボン中らしいんですがね、昨夜はよう騒いでくれよった」

頭の禿げあがった当直の野上巡査が曖昧な微笑をうかべて言った。廊下のつきあたりにやはり金網をはった小さな窓が開いていて、低い雲の層がみえていた。外にはほとんど風はない。

「さっき呼びだしに来たる。いつまで待たせるんや」私服のポケットに、刑事特有の手のつつこみ方をして落合は言った。

「何ですか」と野上巡査は言った。

金網ごしの部屋の光のようにどんよりした意識に疲労を覚え、落合は当直巡査のさしだした椅子に腰をおろした。

「いま、宮下巡査が連れだしにこなかったかな」

「ああ、それですか」と野上巡査は言った。「今その突きあたりにおります。ついでに便所に行きたいと言いますよ」

「宮下もおつきあいしとるんかね」

「いや」野上巡査は酒に荒れた皮膚に文字通り胡麻塩状にちらばっている灰色の鬚をふるわせて笑った。

「まだ若いんだが妙に落着きはらっていて気味のわるい奴ですよ。何でつかまりよったのかな。教養のありそうな風采だったか」

「……………」落合は黙っていた。

「それにしても、実際、近頃の世の中は顛倒しとるな。泥棒の方がおちついていて、巡査がおどおどしとるというのはどういうわけだ」欠伸をした禿頭の万年警邏の顔は、そのとき、途方にくれた小学生のように幼稚にみえた。

「あんたもそう思うかね」落合は言った。

例によって各課の巡査部長の比較論をはじめた老巡査の愚痴に相槌をうちながら、彼は昨夜の不愉快な夢をおもいだした。妙に寒々とした河堤を懸命に駆けている夢だった。逆光をあびて鱗のように光っている貧民窟の屋根瓦が墨々と対岸につづいていた。足もとの雑草には、あちこちにドラム罐が転がっていたと思う。彼は、長い舌をはきだした警察犬の尻を追っていた。こちら側の堤から、軌道とガスパ管だけが走る架橋の枕木を跳んでゆくと、いつの間にかサーカス小屋に場面が変っていた。観客が下から拍手喝采していた。俺は高所恐怖症なんだ、と彼は思った。墜ちるにきまっているんだ。下に受け網があるか。もし救命網がなければ、体は肉のこまぎれになって犬にくわれてしまう。誰か助けてくれ！ 目がさめると、目覚時計が、うつぶせた洗面器の上で通勤時間を告げていた。たすかったと彼は思った。

「あんたはトクや。立原部長はええお人やかならな。大学出の若造などよりや何ぼかええ」野上巡査が言った。そのとき、薄暗い廊下奥の、腰の高さまでしかない便所の扉が軋んで、苦行僧のような瘦身の男のシルエットがゆらぐのがみえた。

予科練の宿舎に似た、柔道畳の刑事部屋には戸口のところまで日光が射しこんでいた。立原部長刑事が宿酔の酒気をおびて巨大な体軀を前後にゆすりながら、哭きさけぶ女を訊問していた。「あんたは、こんなこ

とをする人やない。それはよう解つとる。昨夜の取調べにも非常に協力的やった」猫撫声を相手にあびせかけながら、部長刑事はちらりと落合の方を振りかえった。

「こっちへ入れ」落合は一塊の影のようにつつ立っている男に言った。宮下巡査が不器用に戸口で容疑者の手錠をほどこいてやっている。刑が確定するまで、形式上、相手を紳士として取扱わねばならないから、訊問の際は手錠はずさねばならぬ。

「な、みんなも言うとなつたぞ。あの女は可哀そうや、無理もないちゆうてな」立原部長の声が耳につく。十六畳ばかりの部屋の、もう一つの片隅では、矢野刑事が商人風の男と向いあっていた。

「お前とこの宗教は何や」

畳の上を滑るようにして落合の前に立った相手は眼鏡を没収されたらしく、焦点のあわぬ視線を彼の方にむけた。

「……………」

強盗容疑者は沈黙のまま微笑した。嘲笑や侮蔑に敏感な警察官を途惑わせる、奇妙になれなれしい微笑だった。体重はおそらく十四貫前後、眉間には諦めきったような、奇妙になめらかな艶があり、そして人を信用しない——警察をではなく社会一般を信じようとしない、ニヒリスティックな薄笑いがその頬に浮んでいた。

「なにが可笑しいんだ。なめやがると承知せんぞ」落合は常套的に言った。

「宗教ですか？」強盗容疑者は詠歎的に言った。「それは私の宗教という意味ですか？ それとも家のですか」

「家のだ」

「仏教でしょう、おそらく」

「学歴は？」

「ありません」

「嘘をつくと言知せんと言つたら」

「大学を卒業しました」

「どの大学だ」

「昨夜申しました」

「昨夜のは記録、今日は今日だ。お前が嘘をついてるかどうか、わざわざ調査にいつてやるんだ」

立原部長に訊問されていた貧乏臭い女がヒステリックな泣き声をあげた。あるいはそうした哭き方を慟哭（もく）というのだろうか。地の果てまで届き、死後にも余韻を残しそうな悲鳴をあげてなく。強盗容疑者は緩慢にふりかえって女の方を視た。視ているあいだ、彼は自分の位置をほぼ完全に没却しているようだった。目を注がねばならないのは、暗澹としたみずからの前途であるはずだ。にもかかわらず罪の意識の欠如が、なにか一般的な憐愍で埋められ、犯罪とは関係なく彼の皮膚を覆っている一種難解な不幸の感覚の上を、ちらりと女に対する同情の影がかすめすぎた。

「村瀬よ、きさまは俺の後輩だな。学校の名折れになるとは思わなかったのか」落合は胃の痛みが蘇（よみが）えるのを覚え、神経がいらつき、目標のない憤激にまで感情がたかぶってゆくのを覚えた。

「いや別に」相手は平静に答え、上体を後にそらせて、胡坐（こゝろ）の足をくみかえた。

「家の者が困ることも考えなかったのか？」

「家？」曖昧な微笑がそれに答えた。

「どういうつもりだったんだ。言ってみろ」落合は腹立ちの一つの原因が自分自身が嘘をついたことに由来するらしいことに気付いた。彼は、向いあった犯罪者と同じ大学に在籍したことはあったけれども、相手は後輩よばわりできるほど大学とは関係はなかった。剣道部員としては威張ったものだったが、学徒動員のための駆け足在学のようなものだった。大見得を切って壇上から日の丸禪で挨拶したから、それが生きのびた

敗戦後には元の大学へ復帰する心理的圧迫となった。彼は繁華街の町角で警官募集の広告をみ、警察官の道を選んだ。

「煙草をくれませんか」と相手が言った。

「戦争のせいかわかんらんが、近頃の若いもんは、いったい、世の中をどう思ってるんだ」

「あなたは旅行が好きですか」

「馬鹿野郎、なめやがると承知せんぞ」

メモをとっていたシャープ・ペンシルが折れ、立原部長が、落合の方をみてにやや笑っているのが彼の目に入った。大酒呑みの低脳部長が何を見る。落合は上目使いに容疑者を睨んだ。この瘦身の優男が、どうして武器ももたずに強盗におしいったのか。屈強の男が四人もいる自動車修理業の一家を叫び声一つあがれぬほど恐れさせ、金銭を奪い、揚句に逃亡もせず、なにか考えこんで夜道を歩いていたというのは、どういう訳か。落合には理解できなかった。

「勿体ぶるなよ。調べてやるからな。徹頭徹尾、余罪もしらべあげてやるからな」彼は吐きだすように言った。

取調べが終ると、強盗容疑者は口に水でも含むような微笑をもらし、静かに頭をさげてたちさった。なにか小声で彼は呟いたけれども、落合には聞えなかった。鉄格子のある窓から、しらじらしい朝の陽光が流れこみ、そこにも細かい埃が絶えまなく踊っていた。必要事項を整理して書きこみながら、落合はなにか肝心のことを訊き忘れたような気がした。

——また訳のわからん目的のために、街中をかけずりまわらねばならない。赤の他人の行為の理由を訊ね求め、辻褄のあわぬ人間の気紛れを、検事が読んで解るまでに合理化し跡づけねばならぬ。それにしても、あの男の人を苛々させる憐愍の目付きはどうだ。くそつたれめ。

「けったいな奴やな」商人風の男と対面していた矢野刑事が落合に向って笑った。黄色い歯なみが笑い、しかし、眼鏡の中の目は瞬きもしなかった。

「首をな、真綿でしめるように締めあげたれ。屁とも思つたらん警察がどんなに恐ろしいもんか、思い知らせたれ」立原部長が言った。

「わては何もしてません。わてを早う帰しとくなはれ」女が哭声をあげた。

へそうだ。日頃、自分が全能の者のように錯覚して威張りちらす部長を、いつかきつと締めあげてやるぞ、声にはださず落合は言つた。落合はいじけた自分の憤懣をひた隠しにして、登山帽を驚づかみにすると、取調室をでた。警察署の真向いにある広告塔が、そのときも、哀れっぽい歌謡曲をかなでていた。騒音が胃の痛みをうながした。縦横に自動車の走る交叉点の混雑をみおろしながら、睡りたいと落合は思った。のべつまくなしの緊張から解放されて、ゆっくりと睡りたい。

2

四畳半よりはいくらか奥ゆきの深い留置所の板壁に小さな蝶がとまっていた。ほとんどそれはしみのようだった。窓枠より少しかい位置なのだが、そこは光の死角にあたっていて、外光も廊下がわの電燈も直接そこにはあたらなかった。

昨夜、寝そべっていたときに、村瀬狷輔はそれに気づいた。もう起りえないと思っていたかすかな感情が湧き、彼は長かった逃亡の時間を思った。——今度の犯罪とは無縁に、ただ、彼とそして生きのびたかつての彼の仲間の暗い頭蓋の中にのみ秘められた事件と、そののちの長い逃亡の時間を……。長い遍歴だった。遍歴の最初には、彼はまだほんの若造にすぎなかった。それゆえに、彼の経験はすべて、その秘密な裏街道での経験であり、彼の労働はただ逃亡を長びかすための労働にすぎなかった。一所不住の、誰にあかすこともない不安の日々。

彼の逃亡、それは彼の権利だった。なぜなら彼は彼を裁くものの權威を承認してはいなかったからだ。少くとも最初、彼はそう考えていた。悪夢の中の情景のように一瞬にして歪んだ、あの部屋で、血ぬられた短刀を酒盃のように捧げもちながら、彼は彼の仲間たちと誓約した。アテナイに彼自身をさばく権利を譲渡したソクラテスをあざ笑え！と。

そして、それから……。彼は彼の承認せぬものの片隅で、そのおこぼれの残飯を食いあさり、彼の容認しえぬ善良な人々の慈悲にすがって生きた。長い、寒々した旅だった。形のない牢獄を背おい、いつ自分が悲鳴をあげるか、いつ屈伏するか、それだけを恐怖のうちに見つめながら。逃亡というただ一つの権利を固執することによって、彼はなに一つものを創り出さなかった。何ひとつ育てもしなかった。最初の性交で梅毒にかかった青年のように、渴望しながら嫌悪し、飢えながら恐怖し、路地から路地へ、人目につかぬ道をほつつき歩いただけだった。

目を閉ざしても、北海道の泥炭地の排水工事の飯場から見た曠野の雪、ひととき遍路姿に身をやつして廻った四国巡礼路の菜の花の波、あるいは九州の炭坑街の褐色のボタ山、そしてあちこちの町の夜の歓楽街の空しいイルミネーションのほかに、記憶に残る風景すらほとんどなかった。軌道の石畳の裂け目に茂ったぺんぺん草、履き古した靴下のように臭う溝川、そして棺桶のような狭苦しいベッドの並んだタコ部屋や行路者病院など——最初は身を隠すための方便であり、のちには身をもちくずして、そこ以外に住みようなくなつた暴力団の事務所の二階や娼婦の部屋の有様しか記憶にはないのだ。俺には何も無い。俺は無だ。長い長い無——。みずから辛苦して築きあげた観念と確信が、脱毛のようにばらばらと抜けおちるのを見つめながら、彼はもぐらのように生きつづけた。何のために？理由はわからず、彼はその逃亡の時間の長さだけを思った。

だが、彼にはいま一つだけ解っていることがある。その逃亡の時間がどんなに長かろうと、すべての夢が睡りの時間のうちにあるように、その遍歴も、彼が担って歩んだこの肉体の歴史の一部分としてあり、そし